権威主義の内実

――フランクフルト社会研究所第一世代の議論を中心として――

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程　額賀京介

1　目的

本報告の目的は、フランクフルト社会研究所の第一世代メンバー（エーリッヒ・フロム、マックス・ホルクハイマー等）が問題とした権威主義の内実を分析することである。権威主義は家父長制、サディズム - マゾヒズム性格、さらにはナルシシズムやナショナリズムと一直線に議論されてしまう可能性がある。これらの問題意識は一定の妥当性を持つが、権威主義の生成メカニズムなどは十分に解明されない。そこで本報告では権威主義の単独の特徴を明らかにする。それにより、権威主義と前述した種々の事象との関連性をより理論的に明らかにすることも目指す。

2　方法

本報告では、フランクフルト社会研究所の第一世代の論者たち、特にフロムとホルクハイマーの議論を中心的に取りあげ、テキストクリティークを行う。

3　結果

分析の結果を端的に言えば、本報告で問題とする権威主義は（家父長制の残滓を残しながらも）、家父長制ではない。この権威主義は物象化した資本主義社会からの要請を権威とし、社会成員に従属を迫る。しかし、権威主義は一見すると家父長制の姿として現れ、家父長制が再強化される。これは家族が社会の心理的代理店であり、かつ家族が物象化のなかでは生産的機構として存立しないことと関連する。心理学的代理店としての家族は、個人の成長過程で資本主義社会の要請を絶対視することを個人に要請する。次に、近代家族は生産機構として存立しえないことにより、個人は原子化され、同時に非常に強く構造的に資本主義社会に従属させられる。この個人が原子化された社会状況において、権威への従属は抽象的な服従にならざるをえない。なぜならここでの服従は原子化し物象化した資本主義社会への従属が本質だからである。そして抽象化した権威への従属は、絶対的な従属に変化する。なぜなら崩壊した生産機構である家族を媒介とした権威への従属は、実在的な安定性を個人に与えず、個人は原子化した資本主義社会に常に依存するからである。

4　結論

権威主義研究は、社会成員の原子化という事態に関連し、より詳細な大衆社会に対する分析の端緒となる。大衆社会では、権威主義のほかに、孤独、敵意、不安、ナルシシズム、破壊傾向等の広範な危機が生じていく。このなかで本報告の権威主義研究は、危機を単純な家父長制に回収せず、個人が原子化された状態を分析する重要な観点を与えるのである。

文献

・Fromm, E, [1936] 1987 “Sozialpsychologischer Teil” M. Horkheimer ed., *Studien über Autorität und Familie*, Bamberg: Dietrich zu Klampen, 77-135.(＝ 1977,　安田一郎訳「権威と家族」『権威と家族』青土社,　7-83.　)

・―――― [1941] 1994 *Escape from Freedom*, New York, Owl Books, Henry Holt and Company. (＝ 1965,　日高六郎訳『自由からの逃走――新版』東京創元社.　)

・Horkeheimer, Max. [1936] 1987 “Allgemeiner Teil” M. Horkheimer ed., *Studien über Autorität und Familie*, Bamberg: Dietrich zu Klampen, 3-76.(= 1970,　清水多吉訳「権威と家族」『道具的理性批判 II』イザラ書房.　)

・―――― [1960] 1967 “Autorität und Familie in der Gegenwart”, *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft* ,Frankfurt am Main:S.Fischer.(= 1970,　清水多吉訳「現代における権威と家族」『道具的理性批判 II』イザラ書房.　)